

後援会だより

第41号

2026年3月1日発行

本誌の案内

- ◎ 後援会会長あいさつ
- ◎ 法文学部長あいさつ
- ◎ 専門職大学院報告
- ◎ 臨床心理学研究科長
- ◎ 就職支援事業報告
- ◎ 就職支援室長・就職内定率グラフ

- ◎ 就職活動に係る交通費の一部支援
- ◎ 主な支援事業の成果報告
- ◎ 留学準備金支援
- ◎ 各種実習(海外)への支援
- ◎ 各種実習(国内)への支援
- ◎ 令和7年度後援会役員一覧

後援会会長あいさつ

法文学部後援会長 奥田 純一



「いつも心に好きな歌を」



ボクのせいじゃないと 口に出してしまったら
そこから先には 道はない

自分のせいだと思えばいい そして自分を変えればいい

(B'z : Time Flies アルバム「MAGIC」収録, 2009年)

このたび、鹿児島大学・大学院を御卒業・修了されます学生の皆様と保護者の皆様からお祝い申し上げます。御卒業される学生の皆様にとって、鹿児島大学・大学院での学生生活はいかがだったでしょうか。

思えば約30年前、私はエアコンのない101号教室で、夏は汗だくになりながら、冬は寒さに震えながら授業を受けていました。いま思い出すと、もっといろんなことを学んでおけばよかった、いろんな経験をしておけばよかった、せっかくの環境をもっと活かすことができればよかったと感じます。でも、その一方で、大学時代に考えたことや感じたことが、今の自分の基礎になっているとも思っています。

さあ、皆さんのモラトリアムの時期は終わります。社会に旅立っていく皆さんの心の中は、何で満たされていますか。期待でしょうか、それとも不安でしょうか。いま、世界はこれまでになく大きな変革の波にさらされています。10年後と言わず、1年先であっても、これまでの当たり前が、これからはそうでなくなるかもしれない。そんな漠然とした不安が目の前に漂っているように感じる人が少なくないのではないのでしょうか。

さて、皆さんには、自分を励ましてくれる「歌」がありますか？冒頭に引用した歌詞は私が好きなアーティストのアルバム収録曲です。仕事をしていると、いろんなことが起きます。良いことも楽しいこともたくさんある一方で、トラブルに巻き込まれて腹を立てそれは自分のせいじゃないと愚痴のひとつもこぼしたくなることもあります。そんな時、

私は心の中で、そっとこの曲を思い出し、息をゆっくりと吐き出します。

どんなに技術が進歩しても、世の中の仕組みが変わっていても、根底にあるのは人の人とのやりとりです。それぞれの人が、それぞれの場所で周りの人たちと手をつなぎ自分の役目を果たしながら信頼を積み上げていく。たまにはハラスメントに遭遇するかもしれません。逃げたくなるときもあります。そんな時は、ひと呼吸おいて、周りを見渡してみてください。使える法律や制度はないか、助けてくれる人はいないか、落ち着いて考えてみましょう。視野が狭くなると、人間は自分を追い込んでしまうものです。また、すべてを白黒はっきりさせようとせず、曖昧なことを曖昧なままで受け入れることも、これからの時代には必要です。

何かあったら、好きな歌を思い出しながらひと呼吸おいて考える。これって、簡単なようで実は難しいことなのですが、これができると、あなたの世界は少しだけ穏やかになれるかもしれません。

最後に、この1年間、皆様からさまざまな形で御支援を賜りましたことについて、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また教職員の皆様方におかれましても、学生に対する教育活動に御尽力いただき、ありがとうございました。会員の皆様におかれましては、大学の教育目標を効果的に達成するために、今後とも本会の趣旨を御理解の上、引き続き御支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

法文学部長あいさつ

法文学部長(後援会顧問) 藤内 哲也



法文学部1号館

法文学部後援会会員の皆様には、平素より法文学部・人文社会科学研究所・臨床心理学研究科の教育研究活動にご理解とご支援を賜り、まことにありがとうございます。

法文学部・人文社会科学研究所・臨床心理学研究科を卒業・修了する学生・院生のみならず、そしてこれまでご家族の大学生活を支え、応援してこられた後援会会員の皆様に、教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。本学での学びと経験を胸に、新たな世界へ羽ばたこうとしているみなさんのご活躍を心から願っています。

さて、2025(令和7)年は「昭和」(1926年12月～1989年1月)の100年目に当たり、法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターでも関連イベントを開催しました。会員の皆様の多くは、おそらくその100年間の真ん中あたり、すなわち昭和50年前後にお生まれの世代かと存じます。「昭和」という時代は、イギリスの歴史家E・ホブズボウムのいう「短い20世紀」(1914年の第1次世界大戦勃発から1991年のソ連崩壊まで)にほぼ重なっています。1970(昭和45)年生まれの私にとって、「昭和」は大学受験を目前に控えた高3の1月に幕を閉じましたが、同年9月のベルリンの壁崩壊に始まる東欧革命から2年後のソ連の解体に至る一連の出来事とあいまって、まさに日本の、そして世界の大きな転換点に立ち会っているのだと実感させられました。もともと日本史に関心があったにもかかわらず、大学で専門分野を決める際に西洋史を選択することになったのは、こうした世界史的な出来事を目の当たりにしたからかもしれません。

残念ながら、冷戦構造の崩壊によって世界の平和と安定がもたらされるのではないかという淡い期待は裏切られ、21世紀も四半世紀が過ぎたにもかかわらず、国際世界は混迷の度を深め、むしろ軍拡競争と偏狭なナショナリズムの時代へと逆行しているかのようです。また、貧困や格差の拡大、社会の分断と対立といった問題は、日本においても世界においてもますます深刻化しつつあります。こうした混沌とした時代にあって、人文学や社会科学の多彩な分野について学び、現代世界の抱える諸問題に向き合って、その解決に挑むための専門的な知見や技能を修得してきたことは、これまで以上に重要な意義を持つのではないのでしょうか。一人ひとりの力には限りがあるかもしれませんが、不断の努力の積み重ねこそが社会のさまざまな課題の解決につながると信じ、これからもそうした自覚と責任をもって行動できる人材の育成に励みたいと考えています。

今後とも法文学部・人文社会科学研究所・臨床心理学研究科の教育研究活動へのご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

専門職大学院報告

臨床心理学研究科



大学院臨床心理学研究科
研究科長 廣瀬 幸市

大学院臨床心理学研究科

臨床心理分野専門職学位課程として国立大学初の独立研究科。臨床心理分野の高度専門職業人として、深い学識と卓越した能力及び職業倫理を身につけ、国民のこころの問題に即応した心理支援ができる臨床心理士を養成することを教育目標としています。公認心理師については、大学(学部)で指定科目を修得して卒業し、かつ本研究科入学後、本研究科が指定する公認心理師対応科目を修得することで、受験資格を得ることができます。

令和7年度より臨床心理学研究科長となりました廣瀬幸市です。法文学部後援会会員の皆様には、日頃より本研究科の教育・研究活動にご理解ご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

一向に出口が見えないウクライナ情勢に加えて、大国が自国の論理で侵略を正当化する動きが再来する等、国際政情不安は益々混迷を深めるばかりで、国内の経済循環への影響だけに止まらず、国民の暮らしに深い影を落として不安を醸成しています。SNSの人間関係に習熟できないまま人間形成の大切な時期を過ごしている大学生たちを身近に見ながら、現代社会において人格形成を行うことの大変さを感じています。一方で、人々のこころの支援に携わろうとする院生たちが自らの関わり方に思いあぐねながら日々の臨床心理実践に取り組む姿に、急激な時代の変化を痛感させられます。生成AIの浸透によるこころの形成の変容に対して、教員にとっても自らが教えられてきた通りの内容をそのまま教授するのでは済まない支援のあり方を模索し続けさせられています。これまで以上に院生たちが修了後も自らの領域で接する支援者に向き合えるよう、教育・指導に腐心しています。

さて、令和7年度は「臨床心理士養成に向けた学外施設実習に係る交通費補助」13件、「就職活動に係る交通費補助」5件を始め、「入試説明会における体験発表者に対する謝金」2件他、多面的にご支援をいただき、厚く御礼申し上げます。以下に、本研究科の令和7年度の主な活動を報告いたします。

本研究科は、令和6年度に研究科設置19年を迎え、全国から受験生が集まり、法文学部からの受験生も増えています。先日、令和8年度生に16人の合格者を出したところです。この間、公認心理師資格取得者は直近5年間で98.4%の高水準を維持しています。また、臨床心理士試験合格率は、18期生を含めた修了生全体で97.2%の高さを維持しています。就職率は、令和7年度修了予定生は公務員心理職に4人が合格しており、心理職として全員就職を目指しています。修了後は全国各地でお役に立てる心理士として羽ばたいていくことが期待されます。上記の詳細は、臨床心理学研究科ホームページに掲載していきますので、宜しければご覧ください。



<https://cp.leh.kagoshima-u.ac.jp>

就職支援事業報告

就職支援室

令和7年度の取組など

就職支援室長(就職支援アドバイザー) 灰床 義博

皆様、こんにちは。私は、令和6年度から法文学部の学生の皆さんへの就職支援のためのアドバイスを行っています。

私自身は、それ以前も就職支援などのための鹿児島大学全学部の学生を対象とした講演を行ったり、シンポジウムでのコーディネーターを務めたこともあります。また、鹿児島県庁に勤務していた当時は人事課にて人事主幹などとして2回勤務しており、これらの様々な経験・知識・ネットワークなどを活かし積極的に取組を進めています。

このような取組の結果、学生自身の努力の賜物ですが、今春卒業予定者では、国家公務員の一般職(九州農政局)や航空管制官を始め、地方公務員の鹿児島県庁、宮崎県庁、佐賀県庁、福岡県庁、鹿児島市役所などの他、民間企業の鹿児島銀行、三菱電機住環境システムズ、イオン九州などに合格しています。合格者からは、当方とのESや論文作成のやり取り、模擬面接などが大変有効であったと伺っており、嬉しく思っています。

現在は、来春卒業予定者を中心にアドバイスを行っているところで、現役の市町村職員や、民間企業への就職が決まった学生にも御来室いただき、前者からは公務員を選択した理由や仕事を通じての喜び・苦労などについて、また、後者からは民間企業を選択した理由や就職活動で気をつけることなどについて話してもらったりもしています。

そのような中で、当方が、(NPO法人)コンソーシアム黎明の理事長や、いちき串木野市多文化共生推進懇話会の会長を務めていることなどから、昨年10月9日(木)に鹿児島市立美術館にて「美術鑑賞会」を開催しました。

この鑑賞会には、いちき串木野市の留学生や特定技能外国人材の他、法文学部の学生にも参加してもらい交流会も行いました。参加した学生にとっては、就職活動において、国際交流活動への参加経験ということで「ガクチカ」としてもアピールできる機会になったものと思います。

また、昨年12月3日(水)には、山本一哉副学部長(教授)などの御協力もいただきな

がら「企業等説明会」を開催しました。この説明会には、県内外の10企業等(鹿児島県人事委員会事務局、島津興業、新日本科学、南九州ファミリーマート、商工中金など)が参加され、各企業等の概要説明の後、個別ブースでの面談を行っていただきました。

参加した学生からは、企業等のことを知るとともに、今後の求職活動をどのように行うかということについて、よい学びの機会になったと好評でした。また、全学部対象のキャリア形成支援センターの説明会との比較では、個別ブースでのやり取りの前に全ての企業等の話が聞けてよかったとのことや、参加企業等が当方と御縁のあるところであったため、安心感があり個別ブースでのやり取りもリラックスして行えたということでした。

参加企業等と学生の双方にとって実りある説明会になったのではと思っています。

さらに、これらの方々から、是非説明会を今後も開催してほしいとの要望もありましたので、必要な見直しなども行いながら来年度の説明会を企画したいと考えています。

就職活動は、学生によってスタートの時期にばらつきがありますが、少なくとも現在の企業等の求人活動(インターンシップや内定の時期など)を見る限りでは、その評価はともあれ、早めのスタートをお勧めしたいと思います。

現在、国際的にも国内的にも難しい課題・問題が山積していますが、そうであるからこそ、学生が、公務員・民間企業を問わず、できる限り自身の希望に沿う就職選択ができるよう、引き続き、きめ細やかなアドバイスに努めていきたいと考えています。

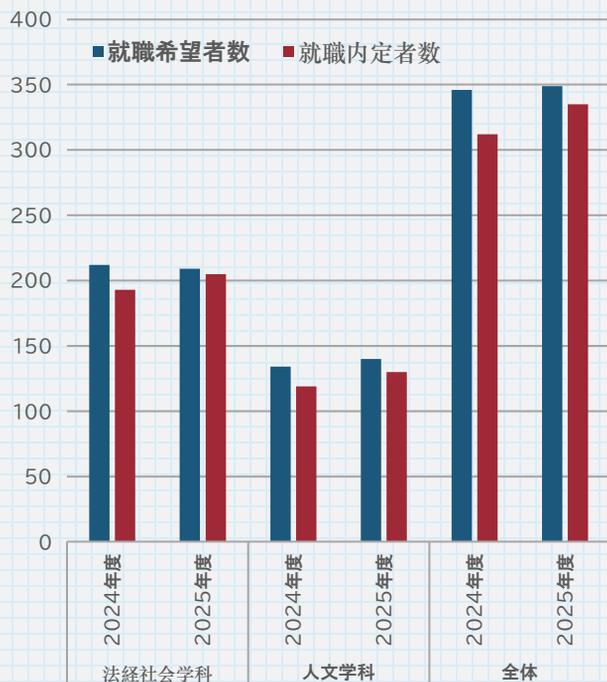
就職支援室の相談対応日は、原則として毎週月・水・金曜日の午後ですが、毎月末頃に翌月・翌々月の相談対応予定日のチラシを法文学部HPの「お知らせ」にアップしていますので、皆様におかれましては、このチラシも御覧の上、お子さん方に就職支援室を積極的に活用するようアドバイスいただくなど、引き続き御支援・御協力をよろしくお願いいたします。

OPEN 就職支援室



原則月・水・金午後1時～5時
法文学部1号館1階

卒業生の就職内定者数の比較(R8.2.1現在)



就職内定率の比較(R8.2.1現在)



後援会就職支援事業

法文学部後援会では就職支援を目的に学生支援事業を実施しています

1

法文学部独自の
就職支援室の運営

就職支援アドバイザーによる
就職相談、模擬面接指導

模擬面接指導、エントリーシート
添削、論文作成のアドバイス、そ
の他就職相談、法文学部独自の
企業等説明会の開催

2

就活交通費支援

県外の就職活動に係る交通費
の一部支援をしています

支援実績（令和8年2月1日現在）
学部・院生 計37名
採用試験／面接／個別説明会／
合同企業説明会（ガイダンス）／
官庁訪問／内定者説明会 等の
参加に係る交通費の一部支援

3

各種検定料支援

在学中に受験した資格試験・
外国語検定等の受験料
の一部支援をしています

支援実績（令和8年2月1日現在）
学部・院生 計30名
TOEIC／実用英語技能検定／
IELTS試験／韓国語能力試験／
HSK（漢語水平考試）／ドイツ語
技能検定試験／秘書技能検定／
ITパスポート試験／情報処理安
全確保支援士試験／宅地建物取
引士資格試験／鹿児島県保育士
試験／行政書士試験／一種外交
員資格試験 等の受験料の一部
支援

※その他にもさまざまな就職支援事業を実施しています

私は在学中に海外留学を経験し、そこで身につけた英語力を生かせる職に就きたいと考え、航空管制官を第一志望として採用試験を受験し、無事に合格をいただくことができました。本試験は、一次試験が宮崎、二次試験が福岡、三次試験が大阪と、受験地が毎回異なる長期戦であり、精神面だけでなく金銭面での負担も大きい試験でした。

就職活動支援の存在を知ったのは、二次試験の準備を進めている時で、友人の勧めをきっかけに法文学部後援会事務局を訪れました。鹿児島に住む私にとって遠方への移動や宿泊は試験を受ける上での大きな障壁であり、費用面の支援は非常にありがたいものでした。本支援があったからこそ、安心して試験に集中することができています。

面接等の対策では、法文学部棟1階の就職支援室を利用させていただきました。生協などの公務員講座を受講していなかった私にとって面接指導してくれる唯一の場所で、面接だけでなくESなどのアドバイスも頂きとてもお世話になりました。

後輩へのアドバイスとして、就職活動を早めに始めることの重要性を伝えたいです。私は大学の硬式野球部に所属しており、部活動と就職活動の両立に苦労しました。野球に打ち込み就職活動を蔑ろにした私が就職活動で苦労したのは言うまでもありません。限られた時間の中でも、早い段階から情報収集を行うことが、将来の選択肢を広げることにつながると学びました。先輩たちから同じことを伝えられていた1、2年生の頃の自分は、「そうは言ってもどうにかなる」とどこかで安心してしまっている状況でした。自分が当事者になると、その意味が痛いほどわかり後悔することになります。就職活動は早いうちからスタートをしていないと勝負すらさせてもらえない残酷な世界です。私はスタートが遅すぎたせいで、かなり狭い選択肢の中から希望の職種を見つけるしかありませんでした。そうならないためにも、将来の自分のために、時間がある今のうちにできることから始めておくことが大切なのかなと感じます。

人文学科4年 中島 倫太郎

臨床心理学研究科2年 森 優介

私は公務員を志望し、地元である佐賀県を第一志望としながら受験日程が異なる東京都特別区を併願先として就職活動を開始しました。就職活動を始めた当初は、佐賀県の単願を想定し、試験対策や自治体研究も地元を焦点を当てて進めていました。しかし、様々な自治体の施策や将来像に触れ、自身の進路について改めて熟考する中でより広い視野で可能性を探りたいという思いが強くなり、試験の約2か月前という時期に東京都特別区を併願することを決意しました。

一方で、遠方での受験には多くの課題も伴いました。特に、試験会場までの交通費や宿泊費は想像以上に大きな負担であり、経済的な不安を強く感じました。加えて、公務員試験の就職活動は基本的に自己負担で、試験勉強の時間を確保するため、アルバイトの時間も制限せざるを得ない状況でした。そのため限られた収入の中でどのように就職活動を続けていくか大きな悩みを抱えていました。そのような中、後援会による交通費支援制度の存在を知ることができました。この制度は、金銭面で不安を抱えていた私にとって非常に心強いものであり、支給していただいた補助金のおかげで遠方である東京の試験会場にも安心して足を運ぶことができました。これほどまでに多くの費用と時間

そして精神的な労力を要するとは想像していませんでした。不安や迷いを感じる場面も多くありましたが、後援会をはじめとする多くの方々からの温かい支援や助言に支えられたことで、最後まで前向きに取り組むことができました。その結果、限られた選択肢の中で妥協することなく、その時点で自分自身が本当に納得できる選択をすることができたと感じています。この経験を通して、何事も一人で抱え込もうとするのではなく、周囲の方々や専門の機関に相談し、助けを求めることの大切さを改めて実感しました。支援を受けることで自分の可能性を広げ、より良い選択をするための大切な手段であると学びました。

これから就職活動を始める方々には、まず自分が何をしたいのか、どのような将来を描きたいのかをじっくりと考えてほしいと思います。そして、不安や困難に直面した際には一人で抱え込まず周囲の力を上手に活用しながら、前向きに就職活動に取り組んでいただきたいと思います。最後になりますが、後援会の事務局の皆様をはじめ、温かいご支援を賜りましたすべての皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

主な支援事業の成果報告

学生の留学・国内外実習の支援、その他教育・研究活動を支援しています

留学準備金支援

支援を受けた学生による成果報告

視野を広げてくれたイギリスでの留学

私は本学の協定校派遣留学制度を利用して、イギリスのセントラル・ランカシャー大学に留学しました。この留学を通じて、私は異文化理解とアカデミックスキルの両面において多くの学びを得ることができました。留学期間中は、現地の大学でイギリス文化に関する授業を中心に受講し、加えて心理学や言語に関する科目も履修しました。文化に関する授業では、特に祝祭行事に関するテーマが印象に残っています。日本には存在しない祝日や、日英で重視のされ方が異なる行事の歴史的背景・社会的意義を学ぶことで、イギリス社会に対する理解が深まりました。

また、学期末にはエッセイの提出やプレゼンテーションの実施が求められ、アカデミック・ライティングにおける主張の立て方や文献の引用方法などを実践的に学ぶ機会となりました。こうした経験を通じて、学術的な表現力や論理的思考力が大きく向上したと感じています。履修した他の授業では、前期に心理学の入門的内容を学びました。犯罪心理学や発達心理学、神経心理学など幅広い分野に触れ、大学生活におけるストレス対処法も学習しました。後期には、言語と権力の関係を扱う授業を受講し、様々な手法を用いて、日常会話やメディアの言語表現を批判的に捉える視点をすることができました。授業では、学生同士のディスカッションや質問が活発であり、受け身で講義を受けることの多い日本のスタイルとは大きく異なっていると感じました。生活面では、初めての寮生活を経験しました。私の住んでいた寮は、各自の個室と共用のキッチンやシャワールーム、トイレの形式で、フラットメイトはヨーロッパやアメリカ出身の学生でした。全く異なる背景を持つ人との共同生活はとても大変で、文化や生活習慣の違いに戸惑う場面もありましたが、多様な価値観に触れ、相手の文化や背景を尊重することの重要性を学ぶことが出来、貴重な経験になりました。さらに、長期休暇を利用して複数の国を訪れ、一人旅にも挑戦しました。旅の計画から現地での対応までを自ら行ったことで、不安もありましたが、大きな達成感と自信を得ることができました。実際に自分の目で見て体験したことで、「もっと広い世界を知りたい」という新たな目標も芽生えました。このように、今回の留学では、現地での生活と学びを通して、単なる知識の習得にとどまらず、国際的な視野や実践的なスキルを身につけることができました。今後は、ここで得た経験を自分の学びや将来の進路に活かしていきたいと考えています。

法経社会学科4年 遠江 理子



トルコ留学を終えて

人文学科4年 小畑 香南子



私は鹿児島大学の協定校であるアンカラ大学に1年間留学いたしました。午前中は同大学提携の語学学校でトルコ語を学び、午後は大学で考古学を中心とした授業を受講するという、個人的に大変ハードな生活を送りました。

留学の目的

トルコに留学するに至った経緯として、2022年にグローバルセンター主催のトルコ研修に参加したことが挙げられます。アルファベットの読み方を覚えただけの拙いトルコ語でアイスクリームを注文できた時の感動が、私をトルコへと誘いました。今回の留学の目的は、専攻する考古学についての見聞を広げることでした。トルコは考古学の聖地とも呼ばれる歴史的な土地であり、その地で学びたいという情熱をもって、このプログラムに参加しました。

学習成果

英語で行われる考古学の授業を履修しましたが、グループワークでは学生たちがトルコ語で話し合うため、最初は全くついていけませんでしたが、しかし語学学校に通い始めて2,3か月が経った頃、少しずつ彼らの会話が分かるようになっていきました。自分の意見を十分に言えたわけではありませんが、理解できた時の喜びは忘れられません。その後は会話にも参加できるようになり、一緒に勉強する中で友情が芽生え、今も連絡を取り合う仲間になっています。さらにトルコ語を一生懸命勉強し続け、最終的にB2のレベルに合格しました。継続すれば語学力は必ず伸びることを自ら証明できたことは、私にとって大きな成果でした。

経験

アンカラ大学の日本語学科には、書道クラブや会話クラブがありました。私はそこでトルコ語を練習し、学生たちは日本語を練習するという相互学習の場を共有しました。互いに学び合いながら過ごす時間は楽しく、時には自分の日本語能力を試される緊張感もあり、留学において自国の文化や言葉の知識も必要だと実感しました。

また、トルコの祝日「Kurban Bayramı(犠牲祭)」に親しい友人の招待で参加しました。目の前でヒツジやヤギが捌かれ、家族や親戚とともに神に感謝しながら命をいただく経験は、私の人生において忘れられない体験となりました。さらに友人の故郷では方言が多かったため半分以上理解できず、途中で涙してしまったこともありますが、それが逆に語学への向上心を強く刺激しました。

進路への影響

今回の留学を通して、私は「継続して努力する力」を身につけることができました。これまで大きな成果を継続的に得る経験があまりなかった私にとって、このトルコ語学習の成果は大きな自信になりました。今後、鹿児島大学での卒業論文執筆やその後の人生においても、この経験は大いに役立つと信じています。



毎週、決まった曜日に通ったり専門の広場で開かれる青空市場



台湾留学

人文学科4年 村岡 里菜

私は台湾の淡江大学文学部に1学期間留学しました。第二外国語で中国語を学んだこと、台湾から来ていた留学生らと仲良くなったことが台湾への留学を決めた理由です。

留学開始当初は中国語が拙く、ルームメイトと話す時でも英語を使ったり、それでも伝わらなければ翻訳機を使うなどスムーズに会話することができませんでした。それでも「おはよう」から「おやすみ」まで中国語を使う環境へ徐々に適応し、色々な人に積極的に話しかけ会話をするうちに日常会話レベルの中国語を身につけることができました。また、留学生用の講義で週に2回中国語の講義も履修でき、自主学習のみだと不足している部分を補うことができたのもよかったです。

淡江大学では留学生用の講義以外は様々な学部の履修が可能で、私は所属する歴史学科の他にマスコミュニケーション学科や日本語学科などの講義を履修しました。中でも「臺灣近現代史」という講義では、日本統治時代の台湾内での出来事を取り扱い戦争と平和への考えを改めて確立させる機会となりました。履修した講義は全て中国語開講だったのですが、講義の内容を理解しようとする中で自分の中国語力も向上させることができたと思います。

また、留学中は週2時間の体育と学科のチー

ム練習に参加し、バレーボールをする機会が多かったです。最初は学科の練習に参加するのが基本でしたが、慣れ始めた頃に体育館の開放時間に行われる有志だけの試合形式に参加するようになりました。周りが全員台湾人選手の中、私1人外国人が混ざってプレーしているのは不思議な感じでした。

その場で即興チームを作って試合をすることが多かったのですが、試合が始まってから日本人なの？と尋ねられた時にはびっくりしました。台湾でもハイキュー!!が人気だったため、私が日本人だと分かるとハイキュー!!を始めとしたアニメや漫画の話で盛り上がるのがよくありました。このように国際交流を深めるにあたり、スポーツやカルチャーの重要性も感じました。

今回の留学では、自分が外国人として暮らすことの大変さや言語、文化の壁を身をもって体感し、日本で暮らす外国人への理解と共感性が高まりました。しかしそこに留まらず、留学先で身につけた知識や中国語、親切的なルームメイトと友人達、沢山の思い出と共に自分自身の成長も感じられました。留学を経てより強まった行動力や積極性は、今後日本での生活でもさらに伸ばしていきたいと思っています。



バンコクにおける企業訪問 タイワコールで学んだ経営戦略と組織マネジメント

人文社会科学研究科
経済社会システム専攻2年 大脇 裕美



このたび、法経社会科学経済コースの安藤良祐先生とゼミ生5名、そして大学院に所属する私を含めた計7名で、タイ・バンコクに拠点を構える「タイワコール株式会社」を訪問する機会を得ました。タイワコールは女性用下着の製造を主力とし、日本国内外へ製品を供給するグローバル企業です。

一見すると、日本の親会社が単独で進出し、海外展開を進めているように思われます。しかし実際には、タイでは外国企業の進出に厳しい規制があり、多くの分野で現地企業との合併による法人設立が義務付けられています。タイワコールもその仕組みに則り、タイ企業との合併会社として運営されています。

この制度によって、表面的には日系企業でありながら、経営の実態は必ずしも日本企業だけで完結していないことを知りました。合併という枠組みの中で、日本企業の強みである品質管理や技術力と、現地企業のネットワークや人材を融合させている点は、国際経営の現場ならではの特徴であり、大変興味深い学びとなりました。

さらに、組織マネジメントの観点からは、日本とタイにおける意思決定プロセスの違いについて多くの示唆を得ました。日本企業では合議的に時間をかけて結論を導く傾向が強い一方で、タイでは経営者や責任者が比較的迅速に判断を下す文化が根付いているとの説明を受けました。この違いは、合併企業における経営判断や組織運営に大きく影響を与えており、国際ビジネスにおいて意思決定のスピードやスタイルをどう調整するかが重要な課題となることを実感しました。現地幹部の方々がフランクに語ってくださった事例は、現場でしか聞けないリアルな学びであり、大変貴重な経験でした。

今回の訪問を通じて、理論として学ぶ経営戦略や組織マネジメントを、実際の企業活動と照らし合わせながら理解することの重要性を実感しました。この経験を今後の研究に活かし、学術のみならず社会的にも意義のある成果につなげていきたいと考えています。

さらに今回の研修では、タイワコールに加え、タイJR九州ビジネスディベロップメント株式会社や西鉄ソラリアホテルも訪問しました。観光・ホスピタリティ分野において、日本企業がタイ市場でどのように事業を展開しているのかを知ることができ、視野を一層広げることができました。

最後に、このような貴重な機会を得られたのは、法文学部後援会のご支援があったからこそです。渡航にあたり、後援会のご支援が海外研究へ踏み出す大きな後押しとなりました。改めて心より感謝申し上げます。

「本実習報告について」

近代日本の戦争と地域・民衆の関係を主体的に学ぶため沖縄で実施したフィールドワーク。ひめゆり平和祈念資料館、沖縄県平和記念資料館等を訪問、沖縄戦に関する戦争展示を見学するとともに、チビチリガマなど沖縄県内に現存する戦争関連遺跡を実見。「唯一の地上戦」が展開された沖縄の諸地域・民衆がどのような被害を受けたか、同時に戦後日本において沖縄県民がどのように希求し、「平和」を実現しようとしてきたかを焦点に、戦争の「記憶」をめぐる諸問題を主体的に理解します。この学生報告では、学生の感じた思いをそのまま伝えるため敬体（です・ます調）には変換していません。

沖縄実習を終えて

1日目は、まずユンタンザミュージアムに行った。「読谷村」を「よみたんそん」と読むのにはここは「ゆんたん」なのかと少し気になった。大抵、こういった博物館などの展示物は直接触れないのに、民家のジオラマに入っていけるのがすごい。間近で見られて面白かった。午後に訪れたチビチリガマは、短時間の滞在ではあったが考えさせられることは多かった。以前は中に入れたそうだが、「遺骨を踏み荒らされるのが辛い」という声で閉鎖されている。あちこちに骨が散乱するほど、こんなに狭い空間で大勢の人が亡くなってしまったのだと分かり沖縄戦の凄絶さを感じた。記憶と戒めを次代に継承していかなければならない反面、さまざまな理由でそれが難しい場合もあり、今もその記憶に苦しめられている方々が多くいるということを感じた。

2日目は、ひめゆり祈念館に行った。当時の学校生活を紹介するブースで、先生につけたあだ名や当時珍しいセーラー服に喜ぶ女の子たちなど、等身大の生活が描かれていて、このあとの戦争のむごさが際立った。展示されているスクリーンで教科書を見ることができて、歴史の教科書が「天皇陛下と日本国民の歩んできた偉大なる物語」のような、なんとというか気持ち悪い文章だった。教育の危うさと重要性を思い知る一方で、証言映像の中の「戦場というものを知らなかった」、「比較的安全な後方での看護作業だからという気持ちだった」ということばが、「後方だろうとお国のために全力を尽くす！」くらいの教育がされていると思っていたから意外だったのと同時に、戦争に向かう勇壮果敢な姿や国への奉仕は教えたのに、現実の被害や危険性を十分に教えることなく戦場に放り出した戦時教育の周到さを感じた。一生懸命勉強して憧れのセーラー服に袖を通して、将来のために努力し続けていたのに、髪型も決められ、奉仕活動という名の戦争協力を強いられて亡くなっていったのが悲しい。解散命令もなぜ出たのかよく分からなかった。

人文学科3年 山中 優菜

指導者が自殺しておいて最後まで戦い抜けなんて命令を残して、いたずらに死者を増やして、本当に意味が分からない。もう一回じっくり回ったら少しは分かるだろうか。このあと金武町の教育センターにあいさつに行ったら、せっかくだからとパンフレットをもらい、解説もしていただいた。考古学って地面を掘るだけではないんだなと実感した。夕食で訪れた居酒屋の店員さんと話していたときに、方言札や米兵との結婚、「人生は許すところから始まる」ということばなど、現地でしか聞けないたくさんのお話を聴くことができ、とても為になったし面白かった。

3日目は、沖縄県平和記念資料館と不屈館に行った。このとき初めて瀬長亀次郎さんを知ったのでとても良い機会になった。資料館はとくにガマのレプリカがもっとも印象に残っている。チビチリガマもそうだが、いずれ現地を見に行くことが難しくなる未来、こうした展示が大事なきっかけになるはずだ。響く水音、近づく戦車の車輪の音、鳴り響く砲音、入り口からちらつく爆弾の光、やけに耳につく息遣い、神経がはりつめる緊迫の感覚をわずかでも体験できた。少しきついものもあったが、本当に学びの多い三日間だった。全部は見きれなかったもので、ここは絶対に来年もう一度来たい。



種子島での実習を終えて

人文学科2年 平井 優成



種子島フィールドワーク

その他エリアでの実習

奄美大島、大隅半島。

受講生は種子島、奄美大島、大隅半島の3つのエリアから自身の興味関心等に応じ、実習先を選びます。



奄美大島フィールドワーク



大隅半島フィールドワーク

私たちは、「かごしま地域リサーチ・プログラム」の授業の一環として9/24～26で種子島にて実習を行いました。西之表市から中種子町、南種子町と南北に渡って種子島の各地を訪問し、次年度以降に行われるリサーチ活動の対象地としたい種子島でさまざまな知見を得ることができました。

種子島での3日間は、種子島が魅力あふれる島であることを強く実感する日々でした。世界最古級の落とし穴が発見されているこの島では古くから精神性豊かな人間活動が営まれていたことがわかっています。一方で、“日本で最も宇宙に近い土地”でもあります。実際に訪れた広田遺跡や種子島宇宙センターでは、種子島に息づく歴史と、まさにここから宇宙へ飛び立とうとしていることの双方に計り知れない可能性を感じました。人間活動にだけでなく、自然にも特筆すべき魅力がありました。遮るもののない太平洋から浜へ打ちつける白波や、道を跨ってアーチを作り私たちを見下ろすアコウの巨木は自然の神秘を大いに感じさせるもので、忘れることのできない光景が広がっていました。

また、種子島での実習の日々は、“自分の知らない”未知の地域”へ飛び込むことの意義を教えてくださいました。たくさんの発見や刺激に溢れた実習での日々は、私たちにまだ見ぬ世界があることを強く実感させ、視野を広げるきっかけとなりました。

現代の日本には数え切れないほどの課題があり、種子島もその例外ではありません。移動の道中でも度々目にした廃校になって人の姿が消えた学校の建物や、農業に従事される方々の労働状況に日本の抱える社会課題が重なって見えました。どこか他人事のように感じてしまうことでも、実際に目の当たりにすることで社会や地域に広がる課題が現実に行き起こっていることを強く実感し、自分事として理解することが促されるのだと身をもって学んだ次第です。

来年度以降のリサーチ活動の中で着目し、調査の対象としていく地域課題は現在模索段階ですが、今後は種子島での経験と、私自身が培ってきた専門分野での学びを関連付けて地域リサーチに取り組んでいければと考えています。意義あるリサーチ活動に繋げていくためにも、またこれからの繋げられる活動にするためにも、種子島実習での学びを活かして日頃から視野を広く持ち、地域に見られる課題に対して自分には何ができるのかという視点で社会を見つめていきたいと思っています。

臨床心理士養成に向けた学外施設実習を通して学んだこと

臨床心理学研究科1年 河合 貴皓

私は今回、児童心理治療施設である社会福祉法人くろしお会鹿児島自然学園にて学外実習をさせていただきました。鹿児島自然学園は、児童福祉法第43条の2に基づく『児童福祉施設』の1つです。家庭環境や学校における交友関係、その他の環境による理由から社会生活への適応が困難となった児童が短期間入所もしくは保護者のもとから通所しながら社会生活に適応するために必要な心理治療及び生活指導を受ける施設です。鹿児島自然学園は中でも大舎制であり、学園内の子ども達が共有の生活空間で日常生活を送っています。また、同敷地内に地域の小・中学校の分教室も備えられており、子ども達は生活しながら、平日は分教室で少人数教育が受けられる体制が整えられています。

鹿児島自然学園での実習を通して、遊びや昼食を子ども達と一緒に過ごす時間や心理職の方だけでなく、生活指導員の先生や看護師の方、栄養士の方のお話を聞く機会、月に一度行われる子どもの支援のあり方を考えるカンファレンスへ参加させていただきました。実習の中で様々な経験をさせていただき、専門職として何ができるのかということも必要ですが、それに固執せずにはまず目の前の子ども達のために一人の人間として真剣に向き合うことの大切さを学ばせていただきました。

また、鹿児島自然学園で生活する子どもは不登校や親子関係不調、被虐待など様々な理由で心のケアが必要な子ども達であり、生きてきた家庭環境が複雑かつ困難な場合も少なくありません。そのような状況の中で子ども達が日々発する様々な言動は一つの視点から見ると“問題行動”と捉えられる場合もあります。ですが、子どもの発する言動の見えやすい部分だけでその子を分かったつもりになると、子ども達が抱えている言葉にできない気持ちや感覚が汲み取られることなく、過ぎ去ってしまうことを体験的に学ぶことができませんでした。この学びを通して、分からないことが沢山あるからこそ一つ一つの関わりや子どもの言動から「こうかな?」、「なぜかな?」を考え続けることの大切さを実感しました。そして一人で悩むのではなく、色々な方に相談しながら柔軟な考え方を持つことの大切さについても学ぶ機会となりました。

今回の実習にあたり、後援会の皆様方からの温かいご支援をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、学内だけでは学び切れない児童福祉分野の実際を体験的に学び得ることができ、職員の方とのお話や生活場面での子ども達との関わりを通して、今まで以上に心理士としての目標を明確にすることができました。本実習で得た学びを糧として、今後もより一層精進して参ります。

後援会事務局から

大学院臨床心理学研究科は、臨床心理士と公認心理士養成の実務訓練に特化した専門職大学院です。その教育課程において、学生は、医療(病院)・教育(学校)・福祉(児童養護施設等)の3領域にまたがる学外施設に出向き、一定時間の実務訓練を行い単位認定を受けます。現代社会に見られる諸問題の解決ができる人材を育成する上で、多様な支援機関を実習先として確保し、支援力向上の機会を学生に提供するため、学外実習先の拡充に努めていますが、一方で、鹿児島市内施設のみでは確保が難しい実情もあり、旧市外を含む市外施設においても実習を行っています。市外への実習は、学生にとっては少なからず交通費負担が伴います。そのため、後援会では、旧市外を含む市外の施設実習に係る交通費の一部を補助しています。

令和7年度後援会役員一覧

会 長	奥田 純一	理 事 <教員>	齋藤 善人	ユ ギジュン
副 会 長	前園 貴子	法経社会学科	丹羽 謙治	横山 春彦
顧 問	藤内 哲也	人文学科	久保 陽子	
常任理事	竹岡 健一	臨床心理学研究科	稗村 孝浩	農中 至
理 事 <保証人・社会人学生(本人)>		監 査	山下 憲一郎	
法経社会学科	奥田 純一	監 事		
人文学科	平田 美保子			
人文社会科学研究科	角 祥平			
臨床心理学研究科	前園 貴子			

お問合せ先

鹿児島大学法文学部後援会事務局

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

E-mail kouenkai@leh.kagoshima-u.ac.jp

電話099-285-7510(7602)

ホームページ <http://www.kadai-houbun-kouenkai.jp/>

FAX099-285-7609